

特集

# 小学校英語の教科化に



2018年度から、小学校では新学習指導要領へ向けて、中学年での外国語活動、高学年での教科「外国語」の先行実施。今回の改訂では、移行措置の実施も決まり、結果的にすべての小学校英語について現場の不安感は強く、特に教員の指導力についての課題意識が強い（下図）。そこで本特集では、新学習指導要領の改訂ポイントやその背景先行して小学校英語の教科化を実施し、試行錯誤してきた自治体授業づくりや教員の指導力向上、授業時数確保の3観点で今後のロードマップの描き方を考えていきたい。

## Q. 小学校英語の教科化に対して、何に不安や課題を感じていますか？

1位 小学校教員の指導力

29人

当初言われていた専任教員を配置してほしい。

〈島根県〉

2位 小学校教員の負担増、多忙化

17人

英語の事前研究をするための時間確保が難しい。

〈鹿児島県〉

3位 小中接続・連携

16人

中学校区内で指導内容を統一するのが難しい。

〈愛媛県〉

4位 授業時数の確保

15人

5位 他教科への影響

13人

\*上位5つを掲載。

\*『VIEW21』教育委員会版 2017年度 Vol.1の読者モニターアンケート結果を集計。回答数 121件。複数回答。



# 備える

がスタートする。  
小学校で対応を取る必要が出てきたが、

を改めて押さえるとともに、  
体や学校の取り組み事例を通じて、



## つかむ

### 先進校が実践経験を基にアドバイス

#### 座談会

▶▶▶ P.4

#### 島根県雲南市

- ◎ 中学校区内の英語教育をコーディネートする人材を配置し、「フェードアウト型連携」で、担当が1人立ちできるよう支援。

## 押さえる

### 移行措置の詳細と、 2018年度までにすべきことを紹介

#### 文部科学省インタビュー

▶▶▶ P.8

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 国際教育課  
教科調査官 直山木綿子

- ◎ 移行措置の授業時数や指導内容はあくまでも最低限。
- ◎ 今後に向けては、各校でCAN-DOリストの作成と、担任の指導力向上のための校内研修を行ってほしい。

## 動き方を考える

### カリキュラム開発と 教員の指導力向上の実践例

#### 事例1 群馬県

▶▶▶ P.12

- ◎ 誰もが同じレベルで授業できるよう、国の事業を活用して独自のカリキュラムを開発。
- ◎ 5つの拠点地域の成果を県内全域に広げる仕組みを構築。

#### 事例2 東京都町田市

▶▶▶ P.16

- ◎ 地元の大学と連携し、小学校中学年向けのカリキュラムを開発。
- ◎ 様々な研修を用意し、現場教員の指導力向上を支援。

### 先進校5校に見る授業時数確保の工夫ポイント

#### 事例3

▶▶▶ P.20

- ・ 島根県雲南市立吉田小学校
  - ・ 東京都武蔵村山市立第三小学校
  - ・ 徳島県阿波市立伊沢小学校
  - ・ 東京都町田市立本町田東小学校
  - ・ 群馬県太田市立旭小学校
- ◎ ①45分授業2コマ確保、②モジュールの活用、③モジュールと45分授業の併用の3パターンについて、それぞれのメリット・デメリットを検証。

# 英語教育をコーディネートする人材の配置で担任が1人立ちできるように支援を

2018年度から小学校英語の先行実施を始める教育委員会や学校は、様々な不安や課題を抱えているのではないだろうか。そこで、文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、2014年度から小学3～6年生で英語教育を進めている島根県雲南市立吉田小学校と、共に事業を進める同市立吉田中学校の先生方に、経験を基にアドバイスをいただいた。小・中学校2人の先生は英語教育推進リーダーとして事業推進の中心的な存在であり、吉田中学校の勝部由紀夫校長は島根県中学校英語教育研究会会長として、島根県教育委員会や雲南市教育委員会とともに事業をサポートしてきた。その3人の先生方に、小学校英語の授業づくりのポイントや教員の指導力向上と意識改革の進め方などについてうかがった。

## 成功する授業づくりのポイントとは？

### 小・中の接続を円滑にする「スタートプログラム」

—まず、雲南市が進める事業の特色を教えてください。

**勝部校長（以下、勝部）** 市内の吉田町にある小学校2校と中学校、及び近隣の島根県立三刀屋高校が事業指定を受けています。指定を受けた小・中学校はいずれも小規模校で、特に小学校2校は複式学級があるため、事業でも複式学級における英語教育と小・中・高の円滑な接続をテーマに研究を進めています。

**村尾先生（以下、村尾）** 小学校では、英語の授業を、中学年が活動型の年

間35時間、高学年が教科型の年間70時間実施しています。具体的には、複式学級であることを踏まえ、他教科と同様に2学年が同じ内容を学び、スパイラルに2回学ぶことで力を伸ばせるよう指導計画を立てています。さらに、地域を題材とした副教材「すてきがいっぱい吉田町 世界に伝えたいわたしたちのふるさと」を作成して小・中で継続的に活用したり、小・中・高をつなぐCAN-DOリストを作成したりしてきました。

**高田先生（以下、高田）** 中学校では、小・中の円滑な接続を図ろうと、入学直後に約10コマ分の「スタートプログラム」を始めました。小学校で

たくさん触れてきた英語の音と文字について、絵カードやアルファベットカードを使ったフォニックスなどを通して、そのルールを体系的に理解させています。プログラムの最後に、初めて聞いた簡単な英単語を書き取るテストを行います。初年度には半数、2年目には8割もの生徒が正しく書き取れていました。小学校でたくさんの英語に慣れ親んでいるからこそその成果であり、年々新入生の英語力の高まりを実感しています。

**勝部** そのほかでは、中高連携にも力を入れています。例えば、中・高でベネッセの「GTEC」\*を活用した合同報告会を年1回実施しています。

### 今回登場いただいた自治体 & 学校プロフィール

#### 島根県雲南市

◎ 2004（平成16）年、6町村が合併して誕生。島根県の東部に位置し、市内吉田町には、日本古来の製鉄法である「たたら製鉄」の遺構があり、国の重要文化財に指定されている。

人口 約3万9,700人 面積 553.2km<sup>2</sup>  
 公立学校数 小学校15校、中学校7校  
 児童生徒数 2,803人  
 電話 0854-40-1072  
 URL <http://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/kosodate/syugaku/kyouikuinkai/>

#### 雲南市立吉田小学校

◎ 1874（明治7）年開校。完全複式学級。ふるさと教育に力を入れ、「総合的な学習の時間」では小だたらを操業し、児童は自分たちで集めた砂鉄からナイフを作る。

校長 坂田英則先生  
 児童数 34人  
 学級数 4学級（うち特別支援学級1）  
 電話 0854-74-0017  
 URL <http://shimane-school.net/unnan/yoshida-sho/>

#### 雲南市立吉田中学校

◎ 1947（昭和22）年開校。校訓は「創造 敬愛 協同 剛健」。吹奏楽コンクール、英語スピーチコンテストや弁論大会で上位の成績を収める。

校長 勝部由紀夫先生  
 生徒数 24人  
 学級数 5学級（うち特別支援学級2）  
 電話 0854-74-0140  
 URL <http://shimane-school.net/unnan/yoshida-chu/>

### ご案内

平成26～29年度 文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」外国語科・外国語活動実践研究成果発表会  
 日時 2017年10月18日（水）、19日（木） 会場 雲南市立吉田小学校、同市立吉田中学校、島根県立三刀屋高校ほか  
 内容 小・中・高の公開授業と研究協議会、文部科学省教科調査官の直山木綿子氏による講演

\* ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」「話す」の4技能を測る。





雲南市立吉田中学校 校長

**勝部由紀夫** かつべ・ゆきお

島根県公立中学校教諭を経て、現職。島根県中学校英語教育研究会会長も務める。



雲南市立吉田中学校

**高田純子** たかた・じゅんこ

英語科主任。2015年度から島根県英語教育推進リーダー。島根県中学校英語教育研究会事務局長も務める。



雲南市立吉田小学校

**村尾亮子** むらお・りょうこ

2014年度から、英語教育コーディネータ、及び島根県英語教育推進リーダー。専門は英語科、特別支援教育。

### 3つの工夫で、活動の必然性や目的意識を高める

——子どもの英語力を伸ばすために、どのような工夫をされていますか。

**村尾** 当初は子どもたちの興味・関心を高めようとゲーム中心の活動を行っていましたが、年度末に事業の検証をした際、年度当初から英語力がかなり低いまま伸びない児童がいて、その子は意欲の面でも消極的な回答をしていることが分かりました。その原因を探ると、ねらいや必然性が弱いため、楽しそうにゲームをしてもすぐに飽きてしまったり、ゲームの成果に固執しがちだったりすることが明らかになりました。

**高田** そこで、これらの課題を踏まえ、

- ①単元目標から逆算して授業を設計する「バックワードデザイン」
- ②子どもも教員も学習の見通しが持てる授業スタイルの確立
- ③学びの足跡が見える1単元1枚の「振り返りカード」の運用

の3点を導入することにしました。

**村尾** 1つめのバックワードデザインでは、まず単元目標を明確にし、その到達のためにどのような活動が

必要かを考え、単元計画と授業案を作成しています。本県のCAN-DOリストは単元目標からボトムアップで学年の到達目標を作成しているのが特徴で、それを基に2016年度に小学校でもCAN-DOリストを作成しました。明確になった到達目標を授業案に示すことで、それぞれの活動のねらいも見える化され、何のために活動しているのかを、子どもと教員とが共有できるようになりました。

**高田** 子どもたちの様子を見ていて、常に目標を意識して取り組んでいて、一つひとつの活動が意味のある積み上げになっています。さらに、目標が明らかになったことで、評価規準も明確になり、授業中の観察、パフォーマンス評価、振り返りカードの分析などを組み合わせて評価できています。小・中ともに同じ考え方で授業づくりをし、目標・指導・評価が一体化したことで、指導の見直しも行いやすくなりました。

——あとの2つは、具体的にどのような取り組みですか。

**村尾** 2つめの授業スタイルの確立では、ユニバーサル・デザインの考え方を取り入れ、授業の1コマの進

め方を「ウォームアップ」→「デモ」→「アクティビティ」→「振り返り」に固定しました(P.6図1)。担任は指導への不安が少なくなり、子どもは活動の見通しを持って、安心して授業に取り組めるようになりました。

**高田** この方法も小・中が統一することで、中学校入学後の学習にスムーズに移行できています。また、これらをより効果的に進めるために取り入れたのが、3つめの工夫「振り返りカード」(P.7図2)です。単元を通した学びが見通せ、さらに自身の成長や課題を感じ取れるよう、1単元を1枚のカードにしています。

**村尾** 子どもたちが書いた内容を見ると、中学年ではゲームの結果や出来栄について書くことが多いのですが、学習が進むにつれて、自身の英語使用についての振り返りや新しく知ったフレーズについてのコメントが増えてきています。

**勝部** これらの工夫は、すべての子どもにとって分かりやすい授業づくりのための重要な要素と言えます。特にバックワードデザインや授業スタイルの確立は、他教科の授業でも取り入れる動きが進んでいます。

# 先生方の不安解消や意識改革をどのように進めるか

## 指導では、英語力よりも子どもへの深い理解が重要

——先生方の指導力や英語力への不安に、どのように対応されたのでしょうか。専科教員やALTに任せるべきという声もありますが……。

**勝部** 本市では、4人のALTが小学校の英語の授業に入るため、授業をALTに任せてしまうこともありましたが、しかし、全面実施が始まると、ALTがどの授業にも入ることは無理です。そこで、担任の先生が1人でも授業をできるようにするため、村尾先生たち加配の先生を、英語専科ではなく、英語教育コーディネータとして配置していただきました。当初はコーディネータが全面的に授業

に入っていました。今は基本的にT2として授業でのかかわりを徐々に減らし、授業案の作成、教材や教具の提案、授業の補助などを行い、最終的に担任が1人立ちできるよう支援しています。本事業では「フェードアウト型連携」と名づけ、担任、ALT、英語教育コーディネータが役割分担を明確にしています。

**村尾** 先生方の英語アレルギーはかなり強く、特に話すことへの抵抗感が大きいようです。英語科教員の免許を持っている私ですら、久しぶりに英語を話すことに抵抗がありました。でも、先生方の授業を見ていて思うのは、子どもに教えなきゃと気負わずに、1つでも多くのクラスルーム・イングリッシュを使おうとして

いる先生ほど、子どもも伸びるといふことです。「先生も英語を話すのは苦手だから、みんなと一緒にできるようになりたい。できないところは一緒にALTに教えてもらおう」という姿勢で頑張る先生の姿を見れば、子どもも失敗を恐れず積極的に取り組みます。大切なのは専門性より指導力です。人とコミュニケーションする力を育むには、子どもたちを深く理解している担任の先生が授業を行うのが一番で、指導力のあるベテランの先生にこそ、英語の授業をしてほしいと思います。本校では、毎日少しずつでも使えるクラスルーム・イングリッシュを増やしてもらおうとリスト化し、ALTと一緒に職員朝礼で3分間の練習をしています。

**高田** 確かに、授業は英語力を身につけるだけの場ではありません。ALTも専科の先生も、小学校教員の実情や特性を十分に理解した上で、授業を共につくってほしいと思います。



重要なのは指導力。  
子どもを深く理解している担任の先生にこそ、  
英語の授業をしてほしい。

雲南市立吉田小学校 英語教育コーディネータ **村尾亮子**

## 仕組みづくりや人的配置で教育委員会は現場の支援を

——教員の負担増には、こういった対応が有効だと思われますか。

**村尾** 授業の目標を見える化し、授業の進め方を教えやすく学びやすいよう構造化して、固定化したことは非常に効果的で、先生方の不安感を小さくしていると思います。指導内容を本当に必要なものに絞り込み、自信を持って指導できる活動とし、目標と評価方法を確立し、先生方に「これならできそう」「やってみたい」と実感してもらえることが大切です。

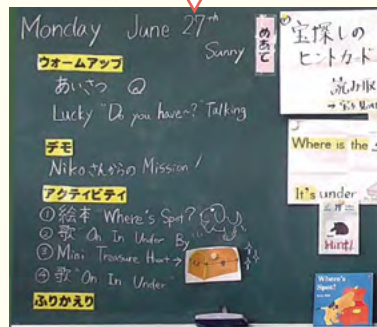
**高田** その支援ができるよう、この事業では研究組織を整備し、小・中・高で連携を深めています。例えば、

図1 1単元、1時間の授業の流れ

- 1単元の流れ** (6時間単元の場合)
- 1 英語や文化への気づき
  - 2 英語表現の慣れ親しみ
  - 3 会話表現での慣れ親しみ
  - 4 会話表現・文字への慣れ親しみ
  - 5 友だち同士での会話またはスピーチ
  - 6 単元末の発表・単元の振り返り

- 1時間の流れ**
- 1 ウォームアップ (挨拶、歌、ラッキーフリートーク\*など慣れ親しむための帯活動)
  - 2 デモ (単元や本時のゴールを示し、子どもに学習への見通しを持たせる)
  - 3 アクティビティ (めあてを達成するためのメインとなる活動)
  - 4 振り返り (振り返りカードの記入。本時を総括した評価の場)

### 1時間のめあてや学習の流れを黒板に見える化



授業の進め方、本時のめあて、活動内容を黒板に張り出しておき、子どもも教員も先を見通しながら活動できるようにしている。

\* 2～3分間、子ども同士や子どもと教員の間で、既習の表現を使って自由に会話をする活動。



村尾先生と私は、2015年度から週1回、約2時間の打ち合わせをして、情報共有や課題の検討を行っています。その中で「振り返りカード」などのアイデアが出てきたり、評価軸をそろえたりして、中1ギャップが生じないようにしてきました。

**勝部** 新しい取り組みを成功させるためには、管理職や教育委員会による仕組みづくりや人的配置が必要です。できれば**中学校区ごとに英語の授業をコーディネートする先生を配置することが望ましい**と考えます。



中学校区に英語の授業をコーディネートする人材を配置して、担任が1人立ちできるように支えてほしい。

雲南市立吉田中学校 校長 **勝部由紀夫**

ALTも専科の先生も、小学校教員の実情を理解し、共に授業をつくるのが大切。

雲南市立吉田中学校 英語科主任 **高田純子**



## コミュニケーション力だけでなく、教員の指導力も高まる

——「なぜ英語教育を小学校から行うのか」「小学校ではまず国語が大事ではないか」という声もありますが、それについてどう思われますか。

**村尾** 低学齢であるほど、子どもは聞いたとおりの英語をそのまま発音し、活動も素直に意欲的に行います。そうした姿から、早期に英語活動を行う必然性を感じています。また、3年生からコミュニケーション活動を継続的に行うことで、人の目を見て話す、相手意識を持つなど、人とかかわる力が卒業までかなり積み上がっています。例えば、あいさつ

やりアクションなど、最初は英語で始めたことが、日常生活でも日本語で自然にできるようになりました。

**勝部** 中学校でも拠点事業を始めてから、合唱での伸びやかな歌声や体育での多彩な創作ダンスなど、生徒の表現力が全体的に高まっていると感じています。さらに、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の結果からは自己肯定感の高まりも見られます。活動を通して、小学校時代からコミュニケーション力や表現力を高めてきた成果だと捉えています。——先生方の足並みをそろえるのは難しかったのではないですか。

**村尾** 子どもも教員も初めての取り組みだったからこそ、自己流ではなく、知恵を出し合い、丁寧に授業づくりをしてきました。そして、統一した形で授業が行えるようになりま

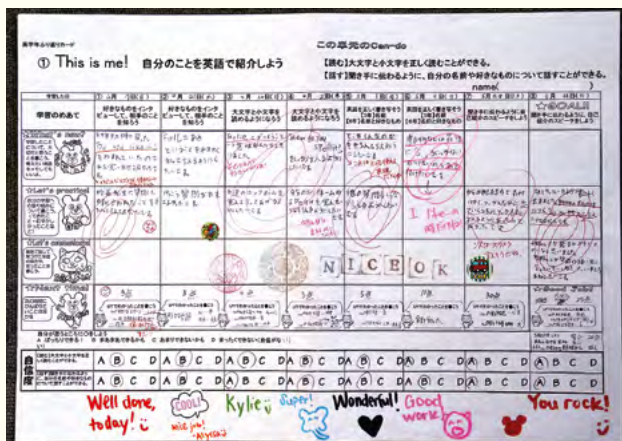
した。その背景には、拠点事業を成功させたいという思いのほかに、子どもたちにコミュニケーション力をつけさせたいという共通の思いがあったからだと思います。そうした授業づくりは現在、他教科にも大いに生かされています。

——先生方の意識も大きく変わったのですね。

**高田** 中学校教員も、小学校と同様に、子ども中心に「なぜ？」を大切にしている指導への意識改革やバックワードデザインの導入など、他教科でも授業改革の気運が高まっています。

**勝部** 本事業の目標は、担任が1人で授業を行えるよう、指導力と英語力を高めることです。その目標が達成されつつある今、このノウハウを市や県全体に伝えていきたいと思っています。

図2 「振り返りカード」(例)



- 1単元の振り返りシートとし、単元の目標と技能別の到達目標を示す。
- 授業ごとのめあてを示し、学習内容、自身の取り組み、次時の目標などを書き込む欄がある。
- 小・中のつながりを考え、フォーマットは小・中共通だ。

### ◎座談会を終えて

事業指定4年目を迎え、担任が英語の授業を行う意義や指導力の大切さを実感している様子が見え始めた。これから本格的に小学校英語に取り組む先生方には、雲南市で見られたような成果を信じて、失敗を恐れずに取り組む姿勢が必要だ。そして、教育委員会には、そのように現場が取り組めるよう、仕組みや人的配置などの面で支援することが求められる。次ページからは、そのヒントとなる事例やアドバイスを紹介していこう。